第35回あすなろ夢建築

大阪府公共建築設計コンクール

入選作品集

テーマ　みどりと繋がる憩いの場

課　題　大阪府営吹田桃山台住宅の集会所

主催　大阪府
　　公益社団法人 大阪府建築士会
　　大阪府住宅供給公社

後援　大阪府教育委員会
　　一般社団法人 大阪府専修学校各種学校連合会

協賛　一般社団法人 日本建築協会
　　一般社団法人 大阪府建築士事務所協会
　　公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部 大阪地域会
　　一般財団法人 大阪建築防災センター
　　一般財団法人 日本建築総合試験所
　　一般社団法人 公共建築協会
　　公益社団法人 日本建築積算協会 関西支部
　　公益財団法人 建築技術教育普及センター 近畿支部

「あすなろ夢建築」
大阪府公共建築設計コンクール事務局
大阪府都市整備部住宅建築局公共建築室計画課
〒559-8555 大阪市住之江区南港北1-14-16
TEL:06-6941-0351（代表）

令和８年３月発行

コンクール概要・総評

このコンクールは、小規模な公共建築物を題材とした実践教育の場を提供することにより、将来の建築技術者の育成を図るとともに、永く府民に愛され親しまれる公共建築づくりを推進することを目的として、府内の建築を学ぶ高等学校生、専修学校生などから提案を募集し、グランプリに選定された作品の提案趣旨を活かして事業化を行うものです。

テーマ　みどりと繋がる憩いの場

課　題　大阪府営吹田桃山台住宅の集会所

主な設計条件

【所　在　地】　吹田市桃山台１丁目
【計画地面積】　約 739 ㎡
【床　面　積】　原則150㎡以下
【　構　造　】　木造
【　規　模　】　平屋建て（地下なし、屋上利用なし）

作品受付期間

令和８年１月５日（月）～１月13日（火）

応募資格

大阪府内に所在する学校のうち、学校教育法の規定による工業高等学校（工科高等学校）・短期大学・工業高等専門学校・専修学校・各種学校及び、職業能力開発促進法に基づく高等職業技術専門校の建築関連学科に在籍する学生・生徒であり、個人又は3名以下のグループ（共同制作）での応募とします。

応募区分

【第１部】工業高等学校（工科高等学校）に在籍する生徒
【第２部】短期大学・工業高等専門学校・専修学校・各種学校
　　及び、高等職業技術専門校に在籍する学生

応募状況

【応募作品数】　202点（うち　第１部57点、第２部145点）
【 応募人数 】　213人（うち　第１部60人、第２部153人）

応募学校

【第１部】（計４校）

大阪府立今宮工科高等学校　　大阪府立工芸高等学校
大阪府立都島工業高等学校　　堺市立堺高等学校（定時制）

【第２部】（計９校）

大阪建設専門学校　　大阪芸術大学付属大阪美術専門学校
大阪工業技術専門学校　　大阪公立大学工業高等専門学校
大阪市立デザイン教育研究所　　大阪府立北大阪高等職業技術専門校
修成建設専門学校　　中央工学校ＯＳＡＫＡ
日本理工情報専門学校

既存集会所

審査会

審査委員

【審査委員長】

角田 暁治
（京都工芸繊維大学デザイン・建築学系教授）

【審査委員】

下村　泰彦
（大阪公立大学名誉教授）

木村　吉成
（大阪芸術大学芸術学部建築学科准教授）

阿曽　芙実
（阿曽芙実建築設計事務所）

小川　悟
（大阪府都市整備部住宅建築局住宅経営室
住宅整備課長）

淺尾　宏
（大阪府都市整備部住宅建築局公共建築室長）

総　評

本年度も皆様のご協力のもとに本コンクールの実施と審査を終えることができました。今年は吹田桃山台住宅を敷地として「みどりと繋がる憩いの場」をテーマとした集会所が課題でした。応募者数は昨年に比して第1部と第2部で増減がありましたが、結果的には全体として昨年を少し上回る応募をいただきましたことに感謝申し上げます。

さて今回の課題につきましては、昨年と同種のものであり応募者には取り組みやすかったのではないかと思います。一方で、現在の計画地は団地の建て替え工事の開始前であり、具体的な敷地の状況や周囲の風景は未だ確認することができない状態でした。建築はそれが建つ場所との関係が極めて重要な側面を持っていますが、今回はそれらを事前に確かめることができず応募者の想像力に委ねざるを得なかったことは、やや残念であるとともにご容赦いただきたい点であります。

審査会においては、実施を前提として要綱に盛り込まれている審査基準や機能面での要望事項を踏まえながら、コンペならではの建築的な提案性や集会所としての新たな可能性への視点も加味しつつ、厳正に審査を行いました。グランプリに選出された案は、植栽計画とともに平面構成やスケールにおいて外部空間と内部空間が巧みに関係づけられており、今回のテーマによく沿いながら団地内のコミュニティ空間としての多様なリアリティと居場所が感じられる、バランスの良い優れた作品です。今後の実施設計を経て、この案の強さが失われることなく実体化されることを願っています。準グランプリ以下の入賞作品群も、そのいずれもが独自の構成の中に心地よさそうな住民の交流の場がつくり出されているものとして評価、選出されました。それらは求められている機能への応答や、空間や形態構成、プレゼンテーションの美しさなどにおいて、一定の優れたクオリティを保持している一方で各案それぞれに一長一短がありました。その建築が担うべき役割を謙虚に引き受けつつ、各自のイメージした空間の可能性を建築という形式へ落とし込む術と、その良さを相手に伝える表現について、これからも考え続けてもらいたいと願います。

最後になりますが、本紙面を拝借しまして、入賞された皆様へのお祝いと、このコンクールに作品を応募いただきました多くの学生の皆様、そしてそのご指導に当たられました先生方のご努力に敬意を表すとともに、審査員を代表して御礼申し上げます。

入選作品の講評

（グランプリ）　「季節のうつろい　つながりの広がり」
外部のデッキ空間が、隣接する内部や植栽とうまく関係づけられており、連続的なイメージと季節感のある良好な環境を形成している。また、コミュニティが誘発される仕掛けが随所にあり、住戸棟によって囲まれた敷地である状況に対して裏側を作らない配慮も見られる。多様なリアリティと居場所が感じられるバランスの良い優れた作品。

（準グランプリ）　「抜けの△」
中廊下形式の建物であるが南面したデッキ空間により両廊下となり、多様なアクティビティや行き来が生まれ、住民同士の交流の活性化が期待できる。テントのような形が象徴的かつ優しい印象であり、地域コミュニティを束ねる場所としてとても良い。内部の動線計画はコンパクトで実用的である。子供が屋根に登る可能性については考慮が必要。

（優秀作品賞）　「光の拠り所」
Y字型の構造による垂れ壁で水平に切り取られたシーンが美しい。リズムを保ちつつも一箇所が半屋外空間としている点や西側の東屋が溜まりの空間として魅力的である。既存の集会所ではエントランス外部で、住民による小さな寄合場が形成されていたが、それが新しい集会所に継承されることが期待できる。コスト面にやや難ありか。

（優秀作品賞）　「緑にほどける集会所」
西側広場との一体利用に配慮した計画となっており好感がもてる。ベンチを適度に設置し「憩いの場」としても期待できる落ち着きのある計画。内外装に木材を使用し温もりがある。気になる点は、建物が敷地南東の端過ぎる場所にあるため、南と東に緑がなく、裏感ができてしまっているため、もう少し西に寄せて計画ができれば良かった。

（佳作）　「安心の環」
建物周りにウッドデッキを回廊のように回し、その高さを人が腰を掛けるベンチの高さとすることにより、通りかかる人とのコミュニケーションが期待できる。デッキを越えた位置に柱やカウンターを配置することにより、常に外側へと意識が向けられる。敷地の中にどのように建物を配置するかについても細やかな配慮が欲しいところ。

（佳作）　「緑樹の社交場」
二つの屋根のバランスと真壁構造のプロポーションが独特で美しく魅力的である。大きな開口部から見える屋根の架構は外観からもその存在が感じられ、和風の雰囲気を持ちながらも同時に現代性を感じさせる計画である。建物の周囲にこれほどまでにウッドデッキを回すより、緑の中に佇んでいるほうが更に美しかったかもしれない。

（佳作）　「にじむ集会所」
機能的にも造形的にもとても丁寧に考えられている。玄関を南側通路から奥にセットバックさせ、その間にデッキを設けることにより、人が溜まりコミュニケーションの場を創出している。西側のデッキは集会室や広場からアクセスがしやすく「憩いの場」としての利用が期待される。パースがエレベーションとはやや雰囲気が異なるのでは。

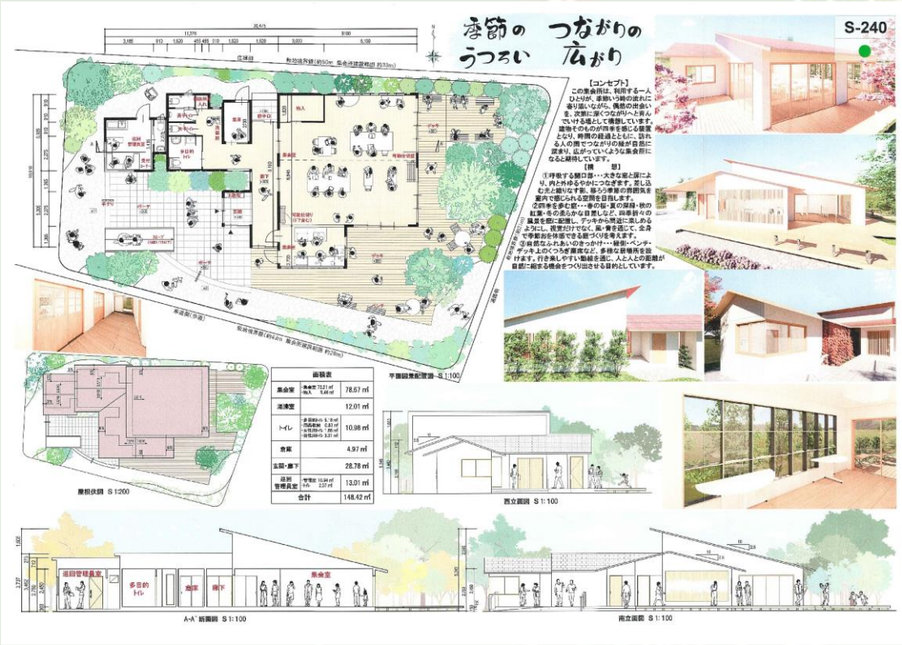
（奨励賞）　「綾なす場所」
建物に中庭空間を配置することにより、西側広場との緑の連続性を感じられるデザインである。利用者は建物の内外の境界を感じることがないであろう独創的な計画。中庭があることで建物の透過性がよく、シンプルなプランでありながら効果的である。中庭も縁側で繋がる等、内外の関係性がイメージ出来ていれば更によかった。

（奨励賞）　「つながって広がる」
二棟の分け方等平面が美しい。エントランスホールを波紋のようにひろがるデッキスペースの中心的な場として機能させている点が評価できる。全ての廊下からウッドデッキに出ることができ「憩いの場」として日常的に利用されることが期待される。玄関の西向きからも出入りできるとより柔軟な建物になり得れたと思う。

（奨励賞）　「ヨセアイツナガル　輪郭を保ったまま関係が生まれる集会所」
小さなヴォリュームをランダムに連結する構成が内部空間にも動きを生んでよい。その斬新なデザインは府営住宅敷地の中で存在感を示す。外部にも変化のある溜まりスペースができて可能性があるが、使い切れているか。カーテンによる集会室の二分割方法はチャレンジングな取り組みではあるが、実際の利用には難がある。

グランプリ 「季節のうつろい　つながりの広がり」

郭（かく）　凱莉（がいり）　修成建設専門学校



この集会所は、利用する一人ひとりが、季節という時の流れに寄り添いながら、偶然の出会いを、次第に深くつながりへと育んでいける場として構想しています。
建物そのものが四季を感じる装置となり、時間の経過とともに、訪れる人の間でつながりの縁が自然に深まり、広がっていくような集会所になると期待しています。

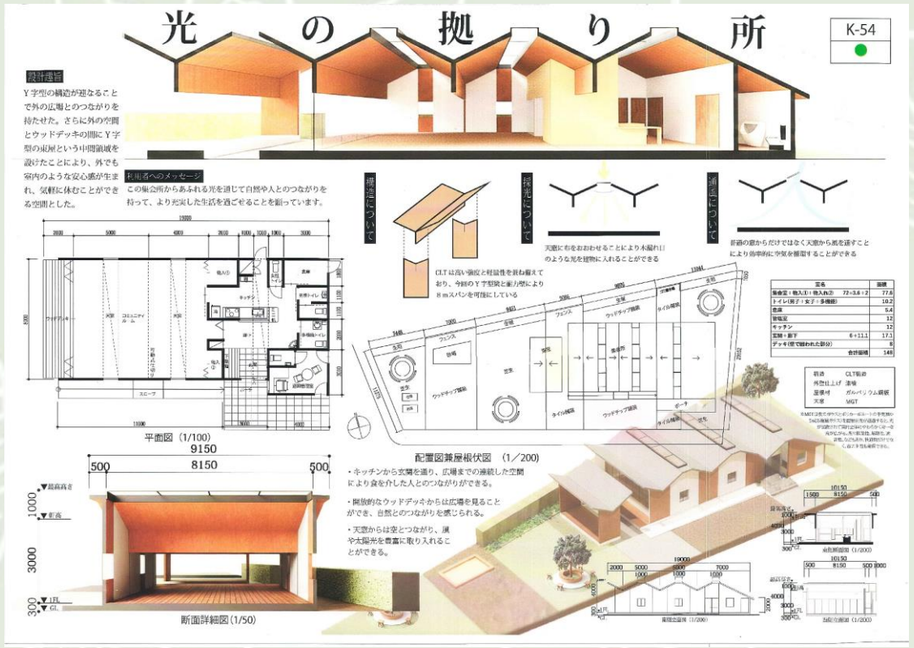
準グランプリ 「抜けの△」

KYAL SIN LINN（ちぇ　しん　りん）　大阪工業技術専門学校

本計画は、団地の南側に広がる公園の緑を生活の中心へ引き込み、住民の日常と自然を結び直す集会所の提案である。建物は公園に向かって大きく開かれた切妻屋根の架構とし、ガラス越しに室内と緑の風景が連続するワンルーム空間をつくる。前面には公園へとにじみ出す竹デッキを設け、室内―半屋外―芝生へと段階的につながる「縁側的」構成とすることで、人々は用途に縛られず、座る・集まる・眺めるといった行為を通して自然と滞留する。公園の緑は背景ではなく建築の一部として取り込まれ、集会所は団地と公園を結ぶ結節点となる憩いの場となる。

優秀作品賞 「光の拠り所」

葦澤（あしざわ）　湧（ゆう）・有吉（ありよし）　賢人（けんと）　大阪府立今宮工科高等学校

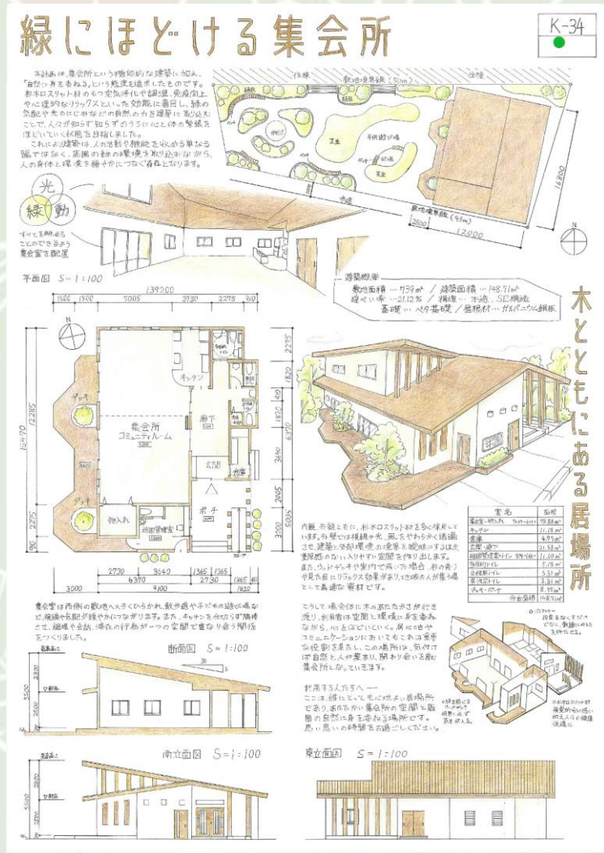


Y字型の構造が連なることで外の広場とのつながりを持たせた。さらに外の空間とウッドデッキの間にY字型の東屋という中間領域を設けたことにより、外でも室内のような安心感が生まれ、気軽に休むことができる空間とした。

優秀作品賞

「緑にほどける集会所」

吉田（よしだ）　万智（まち）　大阪府立工芸高等学校



本計画は、集会所という機能的な建築に加え、「自然に身を委ねる」という態度を追求したものです。杉木口スリット材のもつ空気浄化や調湿、免疫向上や心理的なリラックスといった効能に着目し、緑の気配や光のにじみなどの自然の力を建築に取り込むことで、人々が知らず知らずのうちに心と体の緊張をほどいていく状態を目指しました。
これにより建築は、人の活動や機能を収める単なる器ではなく、周囲の緑の環境を取り込みながら、人の身体と環境を緩やかにつなぐ存在となります。

佳作 「安心の環」

おはら　ゆずほ
小原　橙歩　大阪府立都島工業高等学校

交流を目的とした場所は多く存在するが、「ただ、共にいる」というだけで安心が生まれる空間は少ない。また、現代の地域の交流は世代ごとに分離され、お互いの存在が見えにくくなっている。その結果、安心はみんなで育てるものではなく、個人で確保するものとしてとらえられるようになっている。本計画では、世代が一方向に支えるのではなく、お互いに見守りあうことで「安心が循環する」集会所を提案するものである。

佳作 「緑樹の社交場」

こにし　つばさ
小西　翼　大阪工業技術専門学校

日々の暮らしの流れの中に静かに存在し、人と人との関係を支えるような集会所を計画しました。平面構成は非常に単純で集会室を核に湯沸室や倉庫、トイレといった必要な機能をまとめることで利用者が迷わず空間を使えるよう配慮されています。これは初めて訪れる人や高齢者にとっても安心できる構成になっています。
敷地の中央右側に位置する集会所は主な構造部に木材を多用することで、木々の温かみや脱炭素社会の実現に向けた公共建築物における木材利用の促進方針にも適しています。

佳作 「にじむ集会所」

まきもと　しゅんすけ
槇本　俊介　大阪工業技術専門学校

近年、近所同士のつながりが薄れ、同じ集合住宅に住んでいても挨拶で終わり、それ以上の交流が生まれにくい状況がある。とくに若い世代にとって集会所は、自治会など「用事がある人が行く場所」として心理的な距離が生まれやすい。そこで本計画では、目的がなくても気軽に立ち寄れるようにし、交流のきっかけが生まれる場を目指した。外部の広場は春日大池の輪郭を参照し、うねりのある形で人の動きや滞在を受け止めるように計画した。
緑・広場・デッキ・開口部・坪庭を連続させ、交流にも一人の時間にも対応できて地域の暮らしの中に自然に根付く憩いの場を提案する。

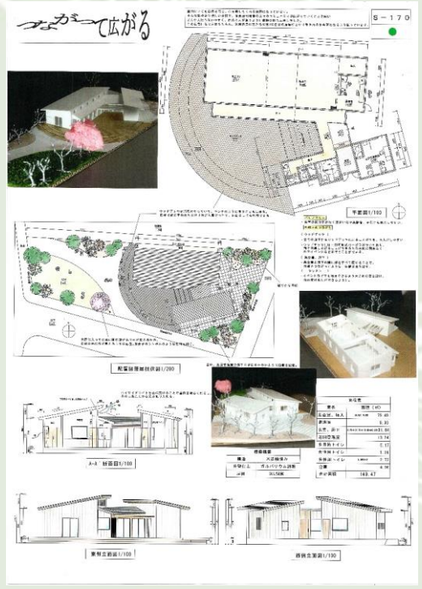
奨励賞 「綾なす場所」

さくの　あやか
作野　彩佳　日本理工情報専門学校

交流すること、学ぶこと、遊ぶこと、休むこと。本来は異なるこれらの行為は、日常の中で明確に切り分けられるものでなく、互いに影響しあいながら重なり合っている。
本計画では用途を固定した空間を並べるのではなく、人の動きや交流、視線、光の動きといった要素を重ね合わせることで、それらが自然に編み込まれていく場を作る。
通り抜けの中で生まれる交流。遊びの延長にある学び、賑わいの傍ににじむ休息。緩やかに連続し、時間とともに使われ方が増えていく。
人と人、人と環境の関係性が折り重なり、日常が「綾なされていく場所」である。

奨励賞 「つながって広がる」

たかはし　しゅう
高橋　朱麗　中央工学校ＯＳＡＫＡ



室内にいても自然を感じ、心を癒してくれる空間になっています。
そんな穏やかで優しい空間で、集会所利用者の方々のコミュニティが広がっていくことを願いどんな人にも使いやすく、自然と人が集うように建物の形も工夫しました。
この住宅に住む方はもちろん、地域住民の方たちの第２の自分の居場所となり愛される集会所になるよう願っています。

奨励賞 「ヨセアイツナガル　輪郭を保ったまま関係が生まれる集会所」

はさか　たいしろう
葉坂　泰志郎　日本理工情報専門学校

団地の住民は世帯の在り方、国籍など歴史の中で多様化しているなかで集会所は、画一的な使われ方や地域コミュニティへの参画の偏りから、どのように脱却できるか。
本計画では、４つの矩形を不規則に寄せ合い、多面的な建築とすることで、あらゆる方向からの視線や関わりを受け入れる集会所をつくる。建築を媒介し、人と人が無理なくつながり異なる存在が融和していく場を目指した。